



—ひとを支えるまちをめざす—

部落解放同盟奈良県連合会 書記長 伊藤 満 さん

本年6月に、私が所属する地元の運動体で、「よねいちさんの かさがみのはなし」という15ページほどの小冊子を発行しました。私の住む被差別部落はその昔、笠神と呼ばれていて、この冊子はムラの歴史を簡単にまとめたものなのです。

冊子の内容は地域の郷土史家、故米田一郎さんのフィールドワークでの説明をもとにしています。私たちの先祖が「鼓の里」と言われた多武峰、妙楽寺周辺で皮革業を営み、戦国時代の終わり頃、妙楽寺の移転とともに現在の地に移ってきた歴史を綴っています。

作成に当たっては、「かさがみ歴史講座」を数回にわたって開催して地域の歴史を学ぶとともに、編集には小学校の先生方にも加わって頂き、小学校高学年が理解できる表現にしました。表紙絵には、以前私が描いた地域のお寺のスケッチを使っています。

なぜこのような冊子を作るに至ったのかについては、理由がいくつかあります。

ひとつは、地域の歴史を住民で共有し、地域への愛着や誇りを取り戻したいとの思いです。被差別部落に住む人々は往々にして、差別を怖れて自分の住む地域を隠そうとしてしまいます。しかし、差別をなくそうとする取り組みの原動力のひとつは、地域への愛着なのです。差別をなくしたい、という思いの中には、差別の中を真っ当に生きてきた私たちの先祖や親の生き様を貶(おとし)められたくないという強い願いが込められています。

もう一つは、地域の若い人たちに被差別の現実を知らせる必要があるとの思いです。この冊子では深く言及しているわけではありま

せんが、部落差別の問題にも触れています。現在では地域の生活の中で差別の現実を知るといったような機会は薄れており、被差別の現実を知らない若者が増えています。私たちは子どもたちに、差別を受けて初めて部落差別のことを知るといったような、ショッキングな経験はさせたくありません。しかし、親が自分の子どもたちに、差別の現実を語るなどということも辛くてなかなかできないのです。この冊子をきっかけに、親が、子どもに部落差別について教えるべきかどうかについてしっかり考え、そして必要と思うなら、このことを話題にして話し合ってもらいたいと思うのです。

さて印刷が上がって、ようやく3000冊の冊子が届けられてきました。配布方法はいろいろ考えましたが、結局地域の全戸に送り状を同封して配ることにしました。そこには「文中では部落差別に関することにも触れています。ご承知おき下さい。」と書いています。

私たちの地域では、少しずつではありますが、まちづくりの取り組みを進めてきました。自閉症の子の居場所を模索して始めた作業所が、地域で活動しています。そこには、今はもう需要も減っていますが、買い物に行けない高齢者のための生活雑貨の店「かさがみ」を併設しています。高齢者への配食や会食、子育て家庭との繋がりを作るための子ども食堂などにも取り組んでいます。現実とはまだ大きな開きがありますが、「差別の痛みを知るが故に人にやさしいまち」をめざしています。